

卒論の原稿を祖廟に捧げ恩師に謝す

小林 學 山

烏兔匆々三ヶ年、光陰は矢の如し、幾年此の方憶れし靈山身延に笈を負ひ、大上人の膝下、朝に夕に尊き聖教を學ぶこと二年有半、卒業の日も間近に迫れり。

願れば入學のその日より諸先生の御講議の御懇切なる、難解の佛書を一句一句詳説して初心の吾等をして理解せざんば止まざらしめ給へり。

法華經史の講説に至りては廣く印度、支那、日本佛教の思想發展の經過を略述し、宗祖の壽量本佛觀に到る本覺法門發展史を説明し、その本化別頭なる所以を示し一目瞭然たらしめ玉へり。噫登延の目的は達したりと言ふべし、諸先生の洪恩は生涯忘れ得ざる所なり。

登延前、有せし疑惑、遠壽の体は理か事か。今法華經史によりて得たる了解を釋せば、大上人の本佛觀は、實に天台の別在報身論、即證体の用たる五百塵点修因感化の報身佛を顯本して眞言の本有阿字、華嚴一乘、中占天台の本覺本有九戈心王に歸したるもの、換言すれば宇宙本有の力用はやがて五百塵点修因感化の實在佛を産み出したるものなり。即、起信論の「本覺の故に不覺あり、不覺の故に始覺あり」の語に由來する始即本の

本覺法門にして、宗祖の本佛觀は實に印度、支那、日本佛教を綜合融會して、報應二身の活動を本覺法身本有の力用なりと顯本して之を壽量本佛の上に論じ給へるものなり。

本化の教學を學ぶ者、宗祖の己心本佛を以つて單本覺理法身と解する勿れ、これはこれ一大事なり。開目鈔に於ける上行の信念は實に宗祖の報身佛の實在に對する絶對的信念の他の何者にも非ず何となれば單理法身は上行差遣の力用あるに由なければなり。

宇陀那院日輝上人言へるあり「經文本行を言ふは別して報身正慧なることを明さんが故なり」と、この言葉よくく味ふべきなり。宗祖の所謂己心本佛、己心釋尊等とは、毒氣深く入りて本心を失ひ、三途の業火に呻吟せる重垢の衆生に對してすら本有九戈の佛種あるを認めて、速に欲惡や煩惱を斷ち切つて佛の使となり、大法輪を轉じ大法の鼓を打ち久遠劫來不斷に繼續する如來の慈悲化道の生命の中に入らしめんとするもの、換言せば慧光照無量、壽命無數劫、久修業所得の報身佛は今なほ凡夫行者の九戈心王に宿りて衆生濟度の爲の苦行は永劫不滅なりこれを生佛一体、即身成佛と申すなり。

凡夫の當体そのまゝ、如來の使たり得べき、かゝる尊き本有の佛性を有し乍ら之を悟らずして惡趣に沈淪せる衆生に速に五字の良藥を服せしめて斷迷開悟、本覺本有の三身を成就せしめんとする宗祖の大類大悲の他の何物に非ざるなり。

キリストの受難、釋迦の六年苦行、我等が先師の忍難弘通皆これかゝる報身佛の慈悲應現なり。かゝる報身佛の存在し得る根底を本覺に歸し、我が此の本地の娑婆世界に之を求むる。之宗祖の壽量本佛觀なり。故に法然、親鸞等が彌陀報身の伽被を西方淨土に求むるを破して「念佛無間」と言ひ、往生思想に一大覺醒の鐵槌を下し玉へるなり。

かく見來れば、大上人の本覺説は、印度の滅罪（灰斷）支那の修證始覺、日本佛教の單本覺乃至彌陀報身等の思想を綜合融會して本門壽量品の上に論じたる、時代の最高思潮たらざんば非ず。

かく言はゞ直授相承の祖意に反すとす者あらんも斷じて而らず。何者、如來滅後三千有餘年、佛教思想の變遷、更に廣くは全世界に於ける宗教思想の發展はこれ實に肉眼に見えざる報身佛が今なほ行者の肉体に宿りて、未曾斷廢永劫に繼續さるゝ衆生濟度の爲の「苦行法」の發層經過に他ならず、換言せば過去の重罪に縛せられたる衆生に解脱を與へん爲の報身佛の「苦行法」の變遷史に他ならざればなり。

末法濁世を救ふべく、刀杖遠流、折伏逆化、血涙を以つて彩られたる六十餘年の御生涯、凡夫としての日蓮の豈よくする所

卒論の原稿を祖廟に捧げ恩師に謝す

ならんや、之實に妙法五字末法廣布の爲、四苦出現の豫言を果すべく、最愛の弟子を刀杖遠流、苦難の中に投げ入れたる如來の慈悲活動が嚴として大上人の背後に存したればなり。

方今科學文明、乃至西洋哲學の影響を受け「久遠は單なる理證なり」となし（宗義沙）乃至、理法身常、單本覺法身常と釋する上古、中古天台の惡弊漸く萌し、佛使上行として末法の暗を救ふべく身命を賭して精進し給ひし大上人の御聖慧は將に忘れられんとす。

然るに祖山の在學三ヶ年、喜ばしい哉、大上人の御魂は法華經史の中に在りて躍如たり、之を拜して余涙潸然たり。よりて刪略して余の所信を附記し、論文の内容となし、又卒業後の信行の方軌たらしめんと欲す、余の淺學、もとより啓蒙に爲に非ず。

たゞ思ふ、我が祖山學院に大聖人の聖慧を奉じ斷乎たる信念毫末も曲ぐるごとく「小權の教は自力修證の教、實大の教は他力佛乘の教」の判に立ち、普く自他の法相を歴史に照して組織体系づけ、宗祖の教學をして本化別途なる所以を説く人ある事を人や否や。

「經文本行を言ふは何故ぞ、別して報身正意なる事を明さんが爲なり」と、先生の經史を拜し今又、輝師の報身正意の文を拜し天台の別在報身の文を拜す、余の信念は斷々乎して確立せり論文の意趣實に茲に在り、今稿將に成らんとして忽然として父の赴に接す、噫悲しい哉。

願れば十年前、予不治の病に呻吟し横臥數年、父母の骨身を

惜しまざる看護と不惜身命の法華信仰、往復五里の山路を千日間素足にて日参したる父母の慈愛の御蔭にて、幸に蘇生することを得たり。今日出家し行學に精進すること、皆父母の慈愛の賜物なり。此の大恩如何でか忘るべき。學院入學の日より今日迄祖廟に素足にて日参するも、亦父母の恩を忘れざらんが爲なり。

思ひ起す今年二月十一日紀元節の佳辰、積雪數尺、寒氣肌を刺す午前三時、例の如く床を蹴つて起き、西谷の清流に身を清め、素足にて白雪を踏み、祖廟に詣で、至心に唱へ奉る玄題三通、踵を返して朝顔鉢の水を汲みて戴かんとするに杓の首はたと地に落ちたり、次いで下駄を履き、石段を降りんとするに緒忽ち切れたり。氣にも止めざりしに翌十二日、又廟參の歸途昨日の石段第一段目に於て下駄の緒再び切れたり。不吉の先兆なるかと案じ居りたりしに、その日午後妹より通信あり「父病重し」と、乃、愈々信心を強盛にして「父の病輕かれ」と廟前に祈願を捧げしが、赤誠をこむる唱題の功德、幸に半年間壽命を増益し得たるものか、七月九日「チ、キトク、キヨウカタピラジサンキセイセヨ」の電報を受けとれり。取るものも取り敢へず汽車に飛び乗り翌朝我が家へ馳せつれば父は既に靈柩の中に在り、優しかりし父の魂は永遠に世を去り玉へり、悲しい哉。

聞けば逝去の前日、病床にありて母に言ふよう「汝寶塔へ參詣し御水を受け來れ」と、乃母、小瓶を携へて寶塔山へ詣で拜殿に登れば、御寶前に、尺餘の日本蠟、燭台の上に點せられあ

り、三十餘名の參籠者は山主上人と共に自我傷讀誦の最中なりき。讀經終つて、師の母に申さるゝは「身延より當病平癒祈願の依頼ありし故に、毎日かくは參籠者と共に祈念し奉るなり」と言未だ終らざるに不思議や風なくして蠟燭の火自然に消えたり母は不吉なるよと案じつゝ、再び燈明を點じ、師に謝意を表して山を辭し、父に御水を奨めしに、父喜びて盡く瓶の御水を戴き「噫我が病癒えたり」と。かくて涙目して遂に再び開かず翌九日午後四時油盡きて燈の消ゆるが如く安らかに永眠せりと。

思へば半年前、紀元節の佳辰、祖廟前、雪中に起りし先兆と日親上人血染の岩の大寶塔の前に消え行く二本の燈火、噫、身延山と寶塔山と、而して佐賀の實家と、互に遠く離れて幾百里然れども、血と肉とを分つ親子の間に通ふ魂魄の普信、寒風身を切る延山の冬、午前三時、降りしきる積雪三尺の上を、素足にて日参する御廟の前、非生現生非滅現滅、而實不滅度、常住此説法の我祖日蓮大上人、今茲に在つて感應ましませしか、忘れられず、御草庵前の石段忽ち切る、下駄の緒再三。忽ち折る、朝顔鉢の杓の柄、その日午後受取る妹よりの通信、「父病重し」寶塔の前に消ゆる二本の燭火。これ實に大上人の御魂魄の永劫不滅を信ずる者のみに許さるゝ感應の瞬間なり。

曾つて二十年前、父は禪家の信徒なりき、而して母の法華信仰に對して凡ゆる罵詈褻言を敢へてしたりしが、ある日（余が小學六年の頃と記憶す）母は本妙寺清正公の御廟へ參詣し、夜更けて歸宅し床に就く前に佛壇に燈明を供へ、壽量品一卷讀誦

し奉らんとて經本を取り出せしに、父は矢庭に「夜更けて喧し」とて經本を奪ひ取り破り捨てんとす、母云く「裂き給へ、疾く裂き給へ、尊き法華經に敵對し、若しこの經本裂けなばその結果如何に成り行くかを見るべきのみ」と。然るに噫不思議なる哉、父の怒り狂へる手の力もて遂に經本を裂くこと能はず、疊の上に投げつけて踏みじる。時に午前一時頃なりき、翌日父は幼年學校の醫務室にて蟲齒三枚を抜き取れり。歸宅後、出血止まず、母は案じて醫師を招かんと願ひしも、父は「出血はすぐ止る由軍醫の言ひければ」とて、遂に醫師を呼ばず。余子供心に父の出血を案じつゝ、寢に就きしが、突然母、予の枕下に來りて「起きよ、父上既に息切れ給へり」と。驚き起き出で見れば、父は出血夥しく、貧血の爲か、既に息絶え脈も止れり。母も兄も、たゞ茫然枕下に坐して死に行く父の顔を見守るのみ、やがて氣を取り直して醫師を呼びに走りしも、如何にせん、醫師の來りしは約二時間の後にして、なすべきすべも有らざりき。

思へば昨夜、午前一時、父が法華の經本を破り捨てんとして果さず疊の上に投げつけて踏みじりしより、僅かに二十四時間後、時も時同じく午前一時、父の息絶えんとは誰か豫想するものぞ。

噫、然るにこゝに一大奇蹟は起れり。母が、死せる父の耳下に口寄せて「父上よ、忘れ給ふな、法華經の信仰に敵對するときは常にかく感罰あることを、ク我悪しかりき、赦し給へ」と速に懺悔して後生には立派なる法華經の行者となり、如來の御

卒論の原稿を祖廟に捧げ恩師に謝す

使となりて衆生濟度の爲に此の世に來り給へ」とて靜かに父の耳下に口あて、御題目を唱へ奉るに、噫不思議なる哉、死せる父は俄然息吹き返し、微かに「我誤てり、懺し給へ、今日よりは我必ず大聖人の檀越となるべし、南無妙法蓮華經」と、このとき初めて父の口より題目の聲迸り出でたり。そのとき母は言ひにけり之必ず神佛の加護による、何となれば昨夜父上經本を裂かんとして遂に裂けず、これ必ず未だ神佛に見放されざる證據なりしなりと。枕邊に坐し居たる醫師も餘りの不思議にたゞ驚くのみにして、母が唱ふる聲に和して共に題目を唱へて合掌せり。

このことありてより父は一變して法華經の熱烈なる信者となりぬ、爾來二十有餘年なり。

余又宿縁ありて父母の許しを得て出家し、日蓮大聖人の門下となれり。延山の究學三ヶ年、卒論の稿成り、卒業の日も目前に在り、兩親の喜びや如何ばかりぞと思ひ居たりしに今忽然として父の死に遭ふ、悲しい哉。さはさり乍ら、思へば父は二十年前、齒の手術をなせし、あの日あの晩、既に世を去りし體なり。而も今日迄生き永らへたること、偏へにこれ母が報恩の爲に唱へ奉りし御題目の功德による。經に説いて「神通力故増益壽命」といへるはこれなり。

今父の遺骨を持し延山に歸へり、祖廟に額き涙又新なるものあり。されど吾歎かじ。

大上人の御魂は今なほ生きて茲にましますせり。父の靈も亦茲

に在り、我今日以後一切の欲惡煩惱を打ち捨て、社會國家の爲に盡し、眞實の佛弟子となり、法輪を轉じ法の鼓を打ち、群生に導いて妙法蓮華の船に乗じ、速に斷迷開悟離苦得樂、寂光の都に到らしめ、此の功德を以つて今はなき慈父の靈位に向向せん、これ眞實の大孝、眞實の報恩謝徳なり。

思ふまゝに

武波正芳

中學を出て、佛教も法華經も一寸も知らなかつた人間が、身延で三年間、ともかく此の事について研究をして見て、果してぞういふ收穫があつたのだらうか。今日の時勢に於いて、自分の職業として佛教を選ぶと云ふ事は、一つの冒険でもある。佛教は今日の文化の主流を爲してはゐない。にも拘らず、此れに頼つて一生を暮さうと云ふには、何かの價値を認めた上での事でなくてはならない。此の意味に於て、卒業をひかえた今、反省して見る事もつまらない事ではない。然し、私は突然に、「法華經の眞理如何」等といふ問を出されても、満足に良心的な答へをする事が出来ない。もし私に、何か此處に書く事が出来るかすれば、漠然とした感じを述べるに止まつてしまふであらう。

願はくば我祖上人哀愍救護を垂れ、某出家沙門の願行を成就せしめ給へ。

卒論の稿を祖廟の御前に捧げ恩師に謝し、亡父の靈前に供へて所感を述ぶ。(高?)

(完)

私達が今學んでゐる事は、皆經典を本にしてゐる。そして今迄手に取つた事さへなかつた經典を、ともかく觸れて見る事だけでもしたのである。經典はそれ自身哲學を説いたものとしても、餘りにも文學的である。釋尊の説法を書いたとしても、數人の文章家によつて美しく飾られてゐる。文學作品として此等のものを見た時、どんな位置にあるものかと云ふ事は一寸云へない。文學は文學にしても、餘りにも眞を理解するには困難な文學である。

經典は多く、釋尊と弟子との問答である。私達が此の經典を研究する時には、果して自分が弟子の立場に立つて釋尊よりの答を受けて哲理を理解して行くのか、或は釋尊と弟子とを此方から客觀的に見て、双方の間に取交される言葉を綜合して研究